



航西日記

卷之六

7
3267
6.

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 JAPAN

門 27
號 3267
卷 6



記卷之六

青淵漁夫

靄山樵者 同錄

佐野常民
圖書之記

慶應三丁卯年十月六日

西洋一千八百六十
七年十一月一日 晴。朝十

時、畋獵主宰來り。昨日獲たる鹿二匹を献セシ。乃其一を調理し。其一ハ英國在留のニストルヘ

賜ふ

同七日 西洋十一晴。朝英國ニストルより迎の軍鑑。今夕、リボルヌ港まで至り。一夜同所へ一宿。明日乗組の事を申立すより。夕四時、漁

早稻田大學圖書館
昭 33.5.31
藏 書

車より乗。此地を幾一。暮七時リボルヌより抵り。オテルデワシントンといふ宿。英國軍艦へ便宜問合せ。同港規則にて外港突入り軍艦。直上岸を許さず。故に船将躬自ら来迎へうなき旨申来る。

同八日月三日西洋十一晴。朝軍艦より書簡来る。風不順なれ。午時三時頃まで待つゝーとの事あり。午後馬車にて市街を一覽。同三時港口に入る。此時軍艦よりバツティラ二艘。各本國の旗を掲げ。士官礼服にて迎ふ。同四時軍艦より移る。

此日軍艦より國旗數々建て。中央より在る最高き檣より御國旗を掲げ。其船將士官まで皆礼服にて乗組の時。樂手兵卒。例の奏樂捧鏡あり。水夫は皆檣上より登らせ並立せ。祝砲の意太里の艦一艘。本船間近より在れ。其式。本船ハエンデミエーランといふ。壯大堅牢なる。軍艦にて。大砲小銃及諸器械とも悉く具備せり。別よ船部屋の設なれ。とて。假よ艤の方より。數部の船室を修理たり。直より船中一覽。風様宜しくて。出帆せる。畢竟太里の艦。誤て錨網を

水練軍

本艦の縄うけよ打繫連合かねあわひ漸く解て。夕六時出撃せり
終夜風穩なり

同九日西洋十一晴。曉風強し。終日竟太里の南辺
を航き。夜八時船將旅懷を慰せんとて。水夫を集
へ曲藝雜話よしやくをなさいむ

同十日月五日西洋十一晴。風靜なり。朝十時水軍火入調

練を観る

是々船と船との攻撃なき。其運動駿速すいそく
て且勁壯けいじょうなり。大砲連發の時、焰烟相掩おおひこして
暫時四方を弁せし。畢り又一隊の陸軍各効銃

と槍やりとを以て。敵船を乘越る驅引くいんをなす。其舉
動尤敏捷ゆうびんぱつなり。船中法則寬優くわんゆうにて嚴肅げんしきなり。
其兵ハ總て水夫より。平生航行こうこうは從事それと
も。戰鬪攻擊せんとうこうげきは至りてハ。別べつは水夫兵卒の分ち
なし。又別べつは一隊の陸軍を置く。陸地接近の
戦爭せんそうの爲ため備ふと云

午後三時。意太里國の孤島ストロンベツキとい
ふ火竈山を近く見る。洋中は屹突えきとつと立て立り。其
形圓曲えんくつよりて巔みねの凹おうなる處より。火炎ほえんを噴出ふきてんを。
其烟えん黒くろとして断絶だんぜつまーといふ。本邦の淺間阿

マルタ島

蘇の如。意太里國のナアブル遙々見え。時々雲
吹て海水藍を採。日落て山巔金を貼。眺望亦奇
なり。夜八時船中又水夫曲藝をも。繩板の術などひり。是を衣服を著せ。まゝ倚
子より。太き縄もて四支を倚子とも縛り。
其本の繩尾を持居て。上より身を容るゝ程の
布袋を被らせ。其中より其縄を解く業なり。本
邦の在古たる其業よ異らず。

同十一日 西洋十一晴。雷雨。朝十時マルタ島へ抵
着。兩縁の砲台例の祝砲ありて。船將士官等礼

服にて纏アシム。中央の檣は御國旗を掲げ。捧銃奏
樂の式なり。午後一時港口より馬車にて上陸。走
騎兵導警衛にて鎮台の官衙へ請走。門の正兩
歩兵一小隊捧銃をも。階梯上り口まで。鎮台
并士官二十人許出迎ひ。兩側より赤服の兵士並
立せ。官衙中の集議場へ請。正面四五段の鎮
台より其左より通弁官シーボルトも一段下まで立
て拜。畢て午餐を饗せ。此節。鎮台の妻及男
馳走アシガシ。同四時馬車にて市街を巡覧。暮七時半夜

餐を供せ。此節、鎮台並水師提督同附屬書

記官等出で。同艦にて接伴を

同十二日 西洋十一月七日 晴。午時官衙を出。馬車あり。城内を見。又陪モ戎器等貯貯ふ所。櫓重門。廬等を見。午後一時、鎮台郷導より港口より。船々々。砲台的打場木を見る。時許あり。港内所泊の軍艦ハ悉く水夫檣より上多敬礼を。夫々ドツク及製鉄所木を見る。此節陸軍場より兵士一小隊陳列して式禮。又製造中のドツクを見。再び衆船十番船の前を過て新港を見る。夕四時歸宿。

調成
練兵

同十三日 西洋十一月八日 晴。朝、鎮台の郷導より。戍兵の調練を観る。又陪モ何より騎一隊。從行セ。其場の中央より大隊旗を建へ。所へ請。夫より陣列前を。一通至巡回り。又元の處へ駐。調練始。ゆき横隊を。乍ち縱隊と。又元の處へ駐。調練始。最頭の隊を黒き戎衣。又小隊の行進十一隊。次る赤衣の小隊二隊。又次は小隊三十七隊。各小隊四十人より四十七八人。外は樂手隊。土坑隊。雜兵。士官より都合四千人。是いふ。斯ニ一小島をうろついて。兵士の調へ。感。

べ一

行軍の法。調兵場の中央より横一文字より並立し。隊を左の方に首より。小隊より作り出一。徐歩環旋して大隊の旗下を過ぎ。元整頓あり。所より至る。行進兩度より。初々毎小隊士官へ効を堅よりて徐歩し。次ハ効を収て急歩。其規則整肅寸分も差引。畢て初の如く陣列し。其中なる小隊七八隊列を超えて進む。二十歩許よりて登銃をなせり。此時此方一行の人より多く進みて。其隊の前面より至る。兵隊へあとしく銃槍の手前を為す。其

内此方元の所より就く。時より一列の兵隊。首尾を旋回して退陣せし。此方ハ其退陣の中央より在りて。前後の兵隊は護衛一官衙比前より至る。各隊分離して其式畢る。夕五時歸る。

同十四日西洋十一月九日晴。午前十時。鎮台及附屬士官鄉導より。砲台より大砲の射前を觀る。陪考打前了みて。海岸より連々大砲を見る。夕三時海岸の曠野より。小鏡的打を見る。往々海岸の涯路を打曲し。連築せし兵卒の屯所より至り。其前高低屈曲の所よ。一中隊余の兵卒左右より列りて。捧鏡

奏樂をあけ。夫より主的打を見乃。的ハ海岸水際
に巾二間余高六尺許の白板の中ヨ黒比箭を引
カ弓を挂置三百歩を距て打放つ兵卒ハ二十人
一隊ヨリ二列より組て叢セリ銃ハレナイドルと
云。輕便の銃あり。我公使ヨモ一叢試ミラタケタ
誤カぞ的中セリ。的打場二所。一モ遠打九十七
丈。的之方ヨ一モ近打凡百歩程アリ。一モ三
日ハ風急にして遠打ハ的中キヨ少社アリ。タ五
時歸る。此夜ハ在留の各國公使等舉手。我公使ヨ
謁せむとて夜會を催し。夜八時より官邸中の集

集義場

議場へ請け。士官の妻子と一同行拜謁。侍せ玉
拜謁。式ハ。施着の時也。同く。公使を
及上く。請け。何孔も階下より出で拜せり。謁け畢
良き下す。来集の中より種々の雜話をきく。茶異
を供へ。夜十時散去。此夜集會の人数凡二百人余
皆鎮台士官并其妻子等あり。同十五日。西洋十一月十日。晴。午後三時。ヨロ子ル郷導によ
て。砲台及新製の大砲等を視る。大砲十六門。玉目
百キロガラム。シニイふ。本港より泊せらカレトシヤ
リといふ。鐵船を見る。允長九十メイトルメイ
ト。モ武三尺幅二十メイトル。外面の鐵二重。張里
三寸。厚四寸五分程あり。蒸氣鼈板。千馬力大砲二十四

門來組六百五十八ありといふ其法則。尤嚴肅よ見ゆ

同十六日西洋十一月十日晴。午前九時半。此港を幾度。同十一時乘組。官荷共物の時鎮台ハ其門前より其抵着の時同刻出帆。順風にて。船脚速き。夜十二時忽關船。駆動の響ひり。環皆駛て是を問ひ。蒸氣機關の破き。又船時曰幸。今日マルタ島を出帆せり。百余里を航。此順風に乗。帆前より航期を延。馬塞里より着せんを乞ふ。

同十七日西洋十一月十二日晴順風。然ども舟行緩。

入風有
同十八日西洋十一月十三日晴。順風。舟行速。一時五六里を航。朝十時舊ひ調ひ。機闊し。之時航セリ。手薄き器械。ハ帆前の方勝。ハ止。此日洋中浮的を流。試砲の懸る

立

同十九日西洋十一月十四日晴。朝十時サルジン島を認む。夕より北風間切られ。とも舟行速なり。

同廿日西洋十一月十五日曇。朝九時。水師調練を見。午後ノ風強く。船の半面を吹。巨浪山をうち。船の

揺動甚し。且機關損所より水入て船二尺許ヤハナ、
むとを。水夫舉手了是を防塞ヨリタマフ。

同廿一日西洋十一月十六日昨夜より風雨暴烈。僅々修繕
セ—機關又破損し。恰も盲龜の縛ミツメに頼り如一。朝
九時風雨亦強黒雲沛然と一丁咫尺を辨ぜず。皆
方向を失す。午後一時稍風雲收り。一孤島を認免
之。即是馬塞里マセリ。舟中舉て喜いゆゑ
至。同二時港口より着川漁船は曳うせ港内に入工
船中より泊を。夜又暴風雨而泊の船く檣ハラを折。或い
帆杆ハタケを吹落さし。終夜響聲止らず。

同廿二日西洋十一月十七日霧。午前十一時半。本船の小艇
にて馬塞里より上陸し。馬車より乗ガラン大酒店
ルーブルドラペエーといふ。客舎より宿を。鎮吉安
着を賀。午後三時。馬車より乗市中を遊覧し。アラ
ドウといふ花園より過る。時より雨後新晴野景殊よ
佳なり。尚行々て海岸より出もし。微風浪を皺み。殘
影山を衝む。水天遠く掩映して眺望開豁ハラハラ至。疇
昔舟中漂蕩の苦辛を回顧。生れへ隔世の想をな
せ。此夜船泊シエツク。并士官十三人へ夜餐を
具也。

席巴里

同廿三日 西洋十一月十八日 晴。朝十時。甲必丹ウエツク。其妻の此地に滞留せりとて相伴て來候。午前十時馬塞里を發。一晩車を乘。暮七時。リヨンへ着。輶く休憩。又汽車ヲ。翌晩七時半。巴里ニ歸館。

同廿四日 西洋十一月十九日 晴。午前十一時。一同來集。一。安着を賀。

同廿五日 西洋十一月二十日 晴。午後三時。ビエシトシヨウモントラム花園を見。ク五時半。今度到着の本邦の留学生八人來候。

同廿六日 西洋十一月廿一日 晴。此地在留の英國公使交脅。ス。新公使來。名簿を出。同廿七日 西洋十一月廿二日 晴。無事。同廿八日 西洋十一月廿三日 晴。無事。同廿九日 西洋十一月廿四日 晴。英國巡覽來。十一月六日。定む。

同晦日 西洋十一月廿五日 曇。無事。

十一月朔日 西洋十一月廿六日 曇。郵船の便れ。各鄉信。寄。英國巡歷。從行の入。此地は留守の入。くを撰定。店。

同二日 西洋十一曇。英國行の旅装を理一む

同三日 西洋十一曇。行中旅費兌換の事を巴里出

店東洋銀行に托す

同四日 西洋十一曇。明後六日即日曜日巴里疾途
の事を在留の英國公使へ書翰を以て言遣を

同五日 西洋十二曇。午前十一時馬車に乘る旅館を
妾一カルテノヲルより滌車^ス移^{イフ}此處^ヲテ
トシベリヨンカシヨンコロ子一行凡て十七
ル等其餘の人々^ヲ駕籠^ヲ送別セリ。暮六
人なり。地方次第よ。此^ノ移爾は寒氣も増^リ。暮六
時半フロシギエ^リ。佛國北邊の海^ヲ沿^フ

地 ふれう。旅客の都令^ヲ役^ハ此處^ヲ船を雇
云々 夜七時カレ一港へ着^ク。オテルデヅサン^ニい
ふ^シ根宿せ^ム。英國^ヲ此地^ヲ在留せる。コンシ
ユル來候^ム。明日妾船の事とも談^セ。

同七日 西洋十二曇。午漫雪。朝五時英國メジヨ
ルエドワル旅舎^ヲ来候^ム。昨夜より風烈^ハ甚^く。忽
ハ妾船の延引を告^ス。午前十一時漸^シ静^キ。馬車^ヲ妾一巷口までゆき。郵便の滌船^ヲ移^イれ
り^此港口の英國飛脚船堅牢^{なれ}。ハ勁風激浪^ヲ堪^カ。アリ^ム。風猶烈^ハ甚^く。忽
地四望暗黒^モ一^テ船の揺動甚^く。領吏^ヲリ^ム。凍

英國

天雪を噴り甲板上。飛雪を逆浪と相激して。一時
は銀山らゝゝ崩る所を以て。まる船中是を視
る人稀なり。此日他の航船ヲ破損せし已に五六
艘行の間。眼前ニ目撃せり。其一艘ハ本船の
船推け。物凄き景状なり。同三
時。英國ドゥブル港へ着く。風ひ一夕れハ平常の
投錨場より着船す。がくく頭くびより最狭せまい手港口へ
漸く上岸。馬馬にて馬車來至。此地セ子ラール。
鎮台及コロ子ル。あを出迎ひ。市街の入口ある旅
舎より志つく憩ひ。入。郷導にて客舎ニ請い。階
上の廣間にてセ子ラール鎮台。其余の官員我公

使の。此地又極り一を賀する。礼式をうす。其式公
使を廣間北正面より請い。祝詞を呈は左の如
ドーブル港。及ドーブル府の支配人。并紳士等
謹而ニウル。ロヤル。ハイ子ス。英吉利の地上上
陸。給ふを祝賀。貴國漸次歐洲各國の形勢
を了解し。且交を厚めさせんを欲し。此度我國又
來臨。給ふへ我等より。總て我國人の為
の盛なる御國との交際を厚ふ。兩國貿易益
利を生す。且開化在中の弘ひろ々べき確證といふ

王より出せらるゝ滌車を乗。暮六時倫敦府へ着
く。此節兩側は一中隊歩兵を列。捧銃奏樂あり。盛飾の滌車を備へ郷導せ。此府より御國の留学生等も一同出迎ひ。暮六時半ブルックストリイトの客舎へ請せ。此客舎の為に設て。其餘滌留中賄方万事。國王より命じ置かれ。且購雇の士官シーボルト。曰此國附属の士官あきへ。我公使滞在中の同國主命。附属せむ。とある。
同八日西洋十二曇。此地季秋より仲春頃まで連日曇天濛霧深く咫尺を辨せ。廣闊巨廊又は幽窗深室及切要の事務。りる市店など。多くを白晝

ヘー我等ユウル。ロヤル。ハイスの幸福を祈る。此府中の人にユウル。ロヤル。ハイ子ス。及貴國を尊敬するの意を表す。千八百六十七年第十二月二日。トブル府町寄合の印を證として申し。支配人ゼジチアーチワトノキ。書記官。エドワルドトノツクルノキ記を

右祝詞を呈する時の支配人の側は侍者礼式。用ゆる具。數品を捧け。此國在留中附属を命ぜ。ミーメシヨールエドワルドもすら呈出て祝詞を呈す。午後四時。客舎を発。國

は衛烟を點き。寒威尤^烈。午前十一時。外國事務執政。ロードスタンレン來り賀。明日國王謁見の事を談。尤懇親の應對。万事簡易殺等なれ。盛服の裝なく陪從も減省せられんを請ひ。且國王當時都外ウエントソールといふ別宮より在り。因て同所より來臨。りとき事ともを談せ。夜七時附屬メショールエドワル卿導あり。議政堂へ参らる。陪せり。

陪從八人なり。此議政堂ハ。ダイムス川より瀕。」

テ廣大なる堂也。内議場二个より成。一ハ貴

戚の人々議する所。一ハ諸民の議す所あり
やりふ

恒例議事ハ夜に入て開く。云。頭取のもの出で
所々を前導せり

同九日 西洋十二月四日 曇。午後一時。外國事務執政 ロードスタンレン。及メジヨールエドワル卿導より。同二時謁見の式り。

王の馬車三輛を備へて迎ふ。第一車ハ公使。并全權と英國外國事務執政。シーボルト。第二車ハ傳從歩兵頭。并エドワル。第三車ハ侍士三人

左全。馬車前驅二騎添ひ。王宮の正門内階下ふ
て下乗せ。此時一中隊の兵卒樂手隊等平面
ふ列。捧銃奏樂あり。夫より。宮中石階を上り
廊下にて暫時休息。程ふく興る。士官出で先
導。唐戸内より揖此内の間を。白書院と云。女王の居所よ
至る。時より女官へ後ろより女官一人次より士官一
人女官一人を従へ。稍進んで謁せらる。公使一
礼あり。演説。側よりシーホルト英語。譯
し。是を述。女王も殷勤。答謝あり。次より其女官
士官を引接。畢き。全權より以下三人一人

宛女王に謁。夫より表書院へ揖。茶果等を
供。陪從一同接伴。連而出き。

畢。宮中より羅列せる。古器什物類を観る。又本
丸席へ復き。白紙の牒へ直筆の名簿を請ひ。夫より退出。夕五時帰宿。劇場の招
待。劇場を看。陪。同十一時帰宿。模様より
各國概ね其體裁を同
り。之を略次
同十日。西洋十二疊。午前十一時。タイムスといふ
所の新聞紙局へ導あり。之を看。陪。其列板
此新聞紙局は。歐洲第一の大島。其列板

至て精密ヨード。又體ハ亦簡易アリ。一日四十人アリ。二時間十四万枚余の芻数を摺出し。毎日諸方ハ鬻ル。其器械甚巧ミヨード且弁利ム。午後一時半戎器を貯ス所を見る。何乞ウ古代の刀槍銃砲其余珍奇の古器物等アリ。此内方今所用のシナイドルヒエ。新発明の銃七万挺を藏セ。又騎馬武者の木偶アリ。是ヘ此國初代王シテ。歴代の王比戎服の肖像アリとい。

帰路。銃砲製造所ヨリ刀劍銀鍊の仕方等を視る。

夕五時半歸宿次

ツナ

ツナ

同十一日 西洋十二月六日 曇。郊外ウーリツナヒム所

少々大砲製造。器械及製作の體を視ル。朝十時漁車ニ乗テイム入シ。いふ都府間より河の橋を越。同十一時ウーリツナヘ抵至。此處一中隊余の捧銃アリ。同所セ子ラル。二人及附屬士官數員出迎フ。夫々金馬車にて屯所前ヨリ。此所ノハ黒き戎服の兵隊。一其所を過て調練場ニ至ル。各隊の砲兵陣列。調兵ビ支度セ。場所を一巡。其傍ニ設ケル。巨大のテントの如く作ニシテ。陣屋へ入。其屋中ニ貯置大

砲車臺。彈丸。軍艦。砲臺築立の具。浮梁。仮橋。其餘種
種の攻守の器械。旧製或新製明の品を精密に模
造。一ノラ。雛形圖式を見。又訓練場へ至り。セ子ラ
ールウートの宰轄せる。大隊旗の本より。此日の
調兵を一覽。此兵を騎砲等を大砲。又騎兵を并
する。二坐。

野戰砲。每坐六門。一門の砲は騎兵七騎を添ふ。
外は大砲を駕せる馬六匹を聯駕。其馬は砲
兵三人を乗す。七騎の兵は大砲の前より並立せ
里。砲の後は彈薬車一輛は四馬を駕。砲兵二

人其馬は乗り。攻撃の時へ。前の騎兵は驅催
し。忽ち馬を下りて。其砲。又馬は乘る。引退
く。騎兵。砲門。彈薬車とも。總て一馳駆する。其進
退坐作の迅速。舉止變化の自在。掌より運が
次は砲兵一坐。門。其次巨砲四門。二坐。此方れ
大隊旗の本より至るを合圖。各隊起立て。行軍式
を立せり。大隊旗下より至る。毎の士官各劍を立て
禮し。回旋して三度よりべり。

徂始は徐歩。次の疾歩。終は急歩あり。いつまでも
規矩整齊。馬首車輪の位置寸分も差錯ふ。

行軍三次よりて。前より列せる騎砲兵。二坐ハ調兵場より其餘ハ徐歩にて各陣營より退く。其止りニ二坐の騎砲兵ハ各隊より離れて。幾砲舉動_{ノ王}。此舉動迅速にて。規則正しく。且發砲せる馬車運用の坐作頗る精妙あり。發砲せる凡半時種々攻撃の舉動をも一畢す。陣營より就く。其ノ王も所を視る。兵隊士官を教育の學校。築造。地理。舍容。算量所。其外諸學科及休日遊息所を設。器械と備つて。遊戲の用ゆる細工物の製作所。運動術の稽古所。兵隊の催せる劇場ある。此也所を見伏す頃也所の前より太子の弟出で一礼

あ主
此弟王ハ十五六歳なる。勤學の為。兵隊_ヲ加リ此地より寄宿勤學中のも。勤學中ハ衣服諸賄とも。惣て其學科は因て。次第差半を定め。平士卒と同様に勉励す。王弟等いへども貴戚を挾て規則を犯さざれど。能くもぞいふ。

一覽畢_{マツク}也所の食盤所にて午飯を。此食盤場は調兵の時。ゼ子ラール始め貴官の人食事の為小設く。上下俱_ノ同盤せり。其より大砲製造所_{ヨリ}。卷張の巨砲製造の

法及弾丸鑄立。小銃の鉛丸製造。其外大砲附屬の器械。製作等を見。又大砲車臺。製造所も至る。其製作を視る。

車臺の木。檜楓の如き堅質の材なれども。砲械仕組鋸にて。挽割より其軽易鍛^{スミ}にて。紙布を裁り如し。頃刻少一で數十の車輪。其他の具を製し。凶セリ。

又大砲製造所も至り。破裂丸。實彈^{スミ}にて。鐵船^{スチール}を破壊する彈。旧砲の巨丸等。種々新發明の精製と視。夕四時半帰宿。夜五時半。御國の留学生世話役

口エートの招待^{アマテ}。夜影画の伎を見る。同九時頃帰る。影画は本邦のものと異らず。此夜九時半過へ。ハマゼスティスヤートルといふ劇場^{スミ}失火^{スミ}。

同十二日月八日。西洋十二曇。朝十時半。典籍貯所を見^{スミ}。

陪を

同十三日月九日。西洋十二雪。午後一時。キリストルパレイス^{スミ}といふ。硝器^{スミ}を作り立てる。巨屋を見る。陪次。滌車小乘。行程九一時程^{スミ}。

此キリストルパレインス^{スミ}を都府郊外^{スミ}。先年此地^{スミ}了催せし。博覽會の跡地^{スミ}。其後

種々修飾一新。士民遊覽の場となり。其
樓臺へ鉄の柱より。家根へ硝子より聳立。其中
小谷國古代の宮殿の模様。其他古器物を陳羅
し。入口の東長き階廊より。處々曲折一層登る。
品物展観の場ハ廣き板間より。其側は巨大な
集樂場なり。音頭の者坐を中心と設け。其前
後左右も大なる礎道の如くより。向高ニ机席
を設け。會日。又ハ五千人余を集め。一時奏樂
をといふ。其廣き板間の正面ハ。階梯より下り
庭の前十出る。此庭遊歩の為めよ。設けられるよ

了奇草佳木を栽え。處々噴水あり。各所小床
机を備へ縱覽せしむ。尤園中曠茫として高垣
曲折。或危石を立。飛泉を掛け。流は沿て石梁を
架。林逕を遠廻す。一の池上より到る池中
の小島。孤岩突兀として。其側は猛獸惡魚の
形を模造。背岩は貰て蟠屈を。都て日暮一の
奇觀也といふ。

同十四日 西洋十二曆朝九時半。スリウスベリ子
スリウスベリ子。大砲の町守を観る。先砲兵の陣
營より築城。臺場等の地圖など一覽。大砲の手

打大
様

前其外車臺の俄々損せし時々應へ。繕方手續の調練を視る。

此手前ニ士官と兵卒ニ打交ては調練あり。其士官ハコロ子ルモカビテインシモト總て期限一年許の交代より。兵卒ニ加運動手前をあもと云夫より海岸へ到り大砲の打方を視る。

此打方ハ海岸ニ掛け並へテ六十斤程の筒より破烈丸を糞せり。内ニ海中ニ懸ヒ石とに付近處ニ設置。滿潮ノ隠れヲ見えられ

ハ乾潮を俟テ試糞也。此地ハ遠淺ノ乾潮ノ英里法八里程引と云

的場ハ各所ニ布置し。近々ハ四五百間余。遠々ハ二里程もありぬ。一一的の形方よりして苗のとく。尤堅牢なりといふ。此日遠近とも。六個の的ニ糞せり。何きも格別の差なく。其的の邊り至れり。又櫓仕掛にて。望遠鏡臺の如く。其上長二間許なる半截セーボンベン筒を備へ置。火薙を糞也。此ハ長き椎の實ノリ。其箭を載シ火を注る尤猛烈。其中者ハ堅牢鉄船といへども。必焚歟。破壊せざるをいふ。又一个の砲試場ニ至り。種々は弾丸弾丸の手本種々の形有

を貯ふ所を見。再び海岸まで三百斤の大砲を
叢を

此弾丸は鉄板にて敵船を突裂する用ゐる
なり。其的二十丁余あると發せられ。七八丁
程前より弾丸破裂し。其勢ひ増す。銳利巨
鉄の如き弾丸の尖先にて。鉄船を突撃せらる
のを全

又鐵板より製する臺場の雛形。及鐵板を打板く
術を視る

此鐵臺場へ。一个の雛形を全う。其内面は石

鐵臺場

より築立。厚さ凡三尺許あり。内外面とも厚さ
四寸餘れ精鐵にて包み立て。鐵板を打板一
へ。鉄船を突撃するための試験にて。厚さ七八
寸許比鐵板より一尺許の檼木を疊み。是を鐵板
の扣木と。其檼木は太き鉄繩を幾度も索て
重ねて。引通一締付けるものなり。其砲
は六十斤許より。十丁余の距離にて。鋼鉄弾を
以て試射した。其鐵板を貫きくらむを見た。
恰も網羅のとく。内面の材へ慘て摧破して全
を見ほ其外六寸。四寸許。なる鐵板を試射し。多

クヨーラハツキモハ摧破セリ。又別ニ炭明ノミ
製セラ。鉄板一枚僅ニ貫く能ハサムモノアリ
トテ。本國所領のマルタ島ヘ。此度精鉄の炮臺
を制する其練鐵の法を用シトイフ

同十五日西洋十二曇。朝十時半。バンクオフエン
ゲランドといふ。政府の両替局。并ヒヨ金銀貨幣

拭改の場及貯所。地金積置場。紙幣製作所等を視
ル

場所廣大ノミ。製作の方頗る簡易輕便。且嚴肅
ナリ。金銀の貯畜セラ。宛カ阜壠^{ムヨウ}の如く。小鉄車

リ。地金を運搬。一造幣局ハ。地金の鎔陶。より金
板金の製法。及圓形鑄裁^{スル}。器械。幣面の模様
を印出キ。方輪縁の鏽刻^{スル}。製作セラ。貨幣
の分量。權衡の検査等。又紙幣の製造。究ニ精緻
コア。方法カ専嚴密ナリ。總て順次。局を分ち
其器械を陳列。細大至らざる所ナリ。是等を
見テ。國の富庶なる推知すべ。

同十六日西洋十二晴。午前十一時。ポルツムウス
といふ地にて。軍艦蓄所。其餘海軍器械を視る。よ
陪モ。汽車みて。午後一時。本地ホテルビイール
ト

云々投宿を

氣車場より兵卒等捧銃立劔奏樂り。馬車の後より赤戎服の騎兵二騎従へ。在勤のアトミラールセ子ラール。其他士官數員禮服より迎送せり。又二つの勤番所ありて歩卒を備へ。海岸にて祝砲行。薄暮雲收り。客舍海岸沿ひ。

草箇中の孤屋より眺望尤佳なり

同十七日西洋十二月十二日晴。午前半時郷導行りて。城門内に入る。門内の市街を過ぎ。港口より至りて。戦争の時。士官兵卒を運漕せ。セラビスといふ巨船

を観る

此艦は尋常の郵船より一て。稍大あり。士官の部屋にて至る美麗なり。乗組千六百人を運漕し。蒸氣七百馬力。一時間英里法十四里を駆。又近來疾明り。元来巨船の航海は不便なる船を。中載一蒸氣を改更。それを観る

是へ精鐵より五分の圓形の砲門を備へ。其砲門の厚さ一尺餘の鐵板の内部へ。堅木の一尺八寸許を疊しき。疾砲の時へ其砲門を砲械より廻ら。巨砲の薬口を出一て疾を。毎砲三

百斤砲也と云。船の縁へ總て鐵にて釣堀のとくよ爲一置事あれハ船縁を釣御し。水面僅數尺許すあり。敵よき狙撃なり難き様にて敵船ニ近寄きハ實弾を以て敵船を摧破せり。又は便す。此船ハ都て軍艦の傍側。又ハ砲台の近邊。咽喉要樞ニ備え。進攻せる敵艦を。狙撃するを要セといふ。

又巨艦二艘より大礮點癡の手續。及小銃隊の運動。并に巨砲の的打を見る

此二艘河泊セ。舳艤相接セ。際^{フジカ}。釣檣を架

1. 各艦を往来。視る者も便す。的打ハ千八百ヤルトの一ヤルト^{即九百間}十五丁^な距離せる海中ニ向け。板ニ黒丸を點^ス。標的を立。初度ハ實丸^ス一糰^ス八次。再度ハ破裂丸四糰^ス。対^ス連糰^スせり。大砲調練小銃の運轉及的打の法。尤整肅^ス。勁捷^ス。連糰^スの丸多く。其的を外さぬ。破裂丸ハ每弾十分の差なく水際^ス至り^ス破裂せり。

右畢テ帰陸キ。夫ヨリ廣大のドツク。并ニ軍艦製所ニ往^ス。附屬鐵板蒸氣。其他種々器械の製を視

調三
練兵

る。夜七時セ子ラールヒレーの在留せる。陸軍所
より夜餐の饗あり。同十八日西洋十二曇。朝七時半。ホルツムウスを
着の時の如き到滌車より。同十時半グリット
とつ地より馬車より。オルトルジヨツクト
と云所より。三兵の大調練。并戰具器械を觀るよ
陪す。迎候の赤隊の騎兵。二隊より先導を
此日。調練の三兵。戦隊より一齊より並立
し。當方。調兵場より抵り。忽地環旋一豎劍の礼
あり。行軍式をあ。初隊大砲一門。一門六門
あり。

徐歩の行軍一巡畢て再び環回一より稍急歩。又環回一より疾歩を。馬ハガロトいふ至て駿足あり尤整齊一列行軍畢て砲兵砲せり。其砲一步の差あり一列行軍畢て砲兵砲せり。其砲聲畢る頃後ろよりもセリ騎兵進撃一騎兵敵陣を驅崩一引退く歩兵進みて一齊より砲を打つ。夫より攻進轟擊の運動轉変一再び三兵を合して三列となり各戦隊より作り砲騎歩と順次をもて總掛の運動各隊連戦の術をかゝり畢て各隊分離一特角の方陣を作り砲銃交發一終る。

浮梁

又調練場側の廣十間許の小川より彼の運輸一来る浮梁の器械を。其士官指令より車より卸し。輜賛時より浮橋を作れり。

此浮梁幅六尺許長二間余の薄き鐵板より丸き浮囊を作り水を水上より浮か。上下より繩を附。其浮囊より二寸角許の細木を多く架り。尤川幅より隨ひて其囊を増し最初架せし所より兵卒六人を載せて突出し續て前岸より達せしむ。夫より細木の上より厚一寸五分幅八寸餘の板木を並へ忽地幅一間半許の橋を作り出せり。其

丸所

板を並べ畢。浮橋の両縁に細々木と繩の附するものより板と細木とを結合せ。動搖摧破の患なく。橋梁成る。一隊の騎兵を渡す。何程廣き河も是を増架され。容易よ。渡りを得。其軽便簡易感ぜべ。

又兵隊の丸所を見る

調練場の七八町右の方へ。總て兵隊の丸所又三兵とも丸所集。日課をもて調練を為す。其丸所の製作二階のちつき長屋を幾棟も。連築。一名アベセラ。其丸所の牌号を変り置。尤士

官の丸所は。稍大にて。二階又は三階あり。いつも妻孥あるか。同居もと。午後二時。丸所中である。ゼ子ラール官舎にて午節。再びグートより。滻車にて。夕五時。倫敦より着す。

同十九日。西洋十二月十四日。雨。朝十時。エトワル卿導。一ノ都府中を流る。川テイムスより。滻船にて。川口

より在り。鉄艦製造の器械を視る。陪を

同廿一日。西洋十二月十五日。晴。夕四時。英國を發。暮

同廿一日。西洋十二月十六日。晴。夕四時。英國を發。暮

七時 ドブルへ着く。エドワル并番學生也。此所まで送り来るドーブルヨリも。漁車場へ一中隊兵卒を歩く。鎮名其他士官等送迎せし。

同廿二日西洋十二月十七日細雨。朝十時客舎を発。漁船より午後一時佛國クレイへ着く。同二時漁車も了。発一。夜七時半已里へ歸りぬ。此節苗守の面く出迎ひ。同八時過旅館より帰着せしる。是より各國巡回畢れり。

航西日記卷之六

叙
日余之自英國而歸也。每過驛亭旅館則首覓新聞紙讀焉。以東洋之事有深閑于余意者也。讀則必有一二可驚之事。雖其虛實不可知而意不免于憂愁消沮。日酌一杯酒罷之上不能酣醉或有鄉導者告曰某所古蹟某所奇景車馬奔馳瞬息可到予惟低頭默然而已。故海程陸路兩

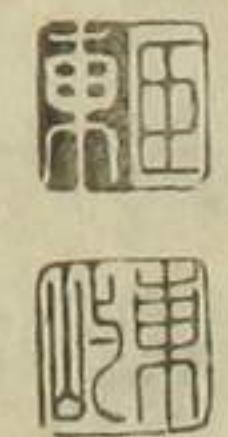
閱月而眠食之外一無所為况有對景觸情發於吟咏者乎歸後蓬轉移住芙蓉峰下既將邇歲驚悸稍定而回想舊踪則宜探而不探宜觀而不觀者區々不能忘于懷然當時一失之於咫尺之間而今也千里之外夢寐不可追則止惟付之浩歎而已矣頃杉浦子基示余其歸東遊草開卷則余曩之所欲探討而不果者興夫經

見聞而不及言者厯々具在焉諷誦數回大有之慰余意者不特其詩之工也抑子基之教法國先余僅數月耳而是時東方消息未聞有可驚者其得從容搜討把觴賦詩亦是之由嗚呼人世變於倏忽之頃而我兩人之旅況頓致相異者如此掩卷悵然者久之

歲次屠維大荒落仲秋上漸無所爭齊主

人題

養清逸人書



歸東雜草

鬻山於浦讓

慶應丁卯、奉使泰西之行、余以書記從焉、自法
京巴里、之瑞西伯黎有故先歸、其間所得詩若干、
錄存于日乘中、南移之後、山林無事、乃耕理
田稿、贊錄七絕可意者數首、以成小冊子、自名
曰歸東雜草、

巴里客居戲作

老奴紅鬚婢青瞳、言語尋常也不通、自笑先生威福
甚、手令顧使一家中、

曉起遊園林

都人遊憩之地
晝日車馬纏至

綠陰涵水曉烟銜、殘月蒼茫印客衫、雅趣却從斯際得、人聲才動便塵凡、

駢至輪蹄響似雷、佳區晝日滿塵埃、風流獨欲擅清賞、人未來時早已來、

觀氣船

一舉冲空竒又竒、銀河抉去伴封姨、縱橫萬里憑機智、不道青雲路更危、

得官書有作

名心老去淡於雲、除目傳來掩耳聞、却披皇曆案芳

事、綠烟紅雨近春分、
南樓春暖聯句錄題

巴里竹枝

傾蓋相逢說弟兄、何妨言語欠分明、誰云當面心千里、才叙寒暄便有情、

踏歌聯袂試相羊、一見相知陌上郎、借得涼牀永今夕、多情自恐負風光、

耕房才色六州知、何數豪華歷一時、得意君王誇豔福、使人能得近前窺、

洗鬢淡粧時世風、細靴輕帽又新工、逢人唐突笑相譏、渺茫花香月中、

一襲羅綺踏謠娘、對々相携上舞場、旋轉輕飛仙曲罷、後房早已鎖鴛鴦、

觀演戲

上場竿木隨當身、謠曲何通哀樂真、入眼惟看動容處、任他喝采做傍人、

自黎昂將抵瑞西途中

黃綠叅差秋尚淺、輕烟細雨暗前溪、滌車好是電馳去、左右青山入瑞西、

瑞西

民風輯睦調三時、無事耕來樂雍熙、擅政君方湏猛

省人間別見小花旗、

瑞西伯黎客舍苗別諸子

客中殊覺別離酸、况逢異鄉秋正闌、他日難忘此情境、水光雪影照愁寒、瑞西有山冰雪四時不消白挿天表真奇觀也

馬塞里客舍憶諸友于時黃村先生逗巴里郁堂青潤二兄在荷蘭夢槎兄在瑞西

淒風苦雨暗黃昏、秋冷征衣濕淚痕、遙憶故人同此況、天涯各處各消魂、

弔橫山子敬墓

漂泊靈龜怨未回、絕疆猶是當年哀、此身何期再遊

到萬里孤墳掃宿苔、常余輩強諫不聽、終至不起、使君憫之、厚葬其地、勒文于石、以表其易簣之前一夕、自知其不起、攬涕謂余曰、大夫志業未立、而為外邦之鬼、此遺憾耳、因慷慨嗚咽、且托以後事、今奠其墓、有非偶然者。

過哥爾西克海峽逢雷雨、第一世拿破烈烏雲四合倏時中、撼海震聲轟太空、雨若飛丸風若箭、憶起英雄酣戰風。

船中口占地中海

何藉消過夏日長、帆陰爭占午時涼、眠餐自若人無事、也是乾坤一別鄉。

八月念六夜、一天無翳、海上如席

涼風吹浪暮烟收、如鑑澄空正仲秋、萬頃蒼茫唯一色、銀河白醮夜潮頭。

亞拉散大觀花園

樹、清陰庇數弓、看他芳事已成空、尚剩東皇晚粧妙、柳楊綠映薔薇紅、

園中所見

輕車肥馬去如飛、爭向遊園賞晚菲、應是親知有相贈、黃昏仍取好花歸、

埃及三角山

峻嶒突兀欲摩天、回想滄桑幾度遷、功業烟雲人世
夢、一丘高聳三十年。

宿埃及王別業

頽欄剝壁古樓臺、雨涴塵埃馭紫苔、青燈一點風吹
滅、恍疑夜鬼嘯梁來。

以上四首係癸亥行
所作今錄存于此

蓆士客舍

飛蠅擗面漲塵埃、層樓幾處半欹、歡喜舖頭聊遣
興、鬱金香泛水精杯。阻日多地熱、野多荒漠、停宿處
星宇飲食偕清潔、大快人意。余名以歡喜舖

揚、蠅、蚋、羣集甚可厭也。

及到此港、有歐人逆旅

其二

依稀風物記曾來、酒味茶香夢一回、少婦迎人笑相
揖、鑪頭先把健康杯。逆旅有婦、原意太里人、余前行
次、狀相識、○故人把杯、必立祝其人健康以飲

紅海

楓山涵影映蒼溟、赤日炎光接亞丁、漸喜風程將出
峽、船燈一點小如星。將抵亞丁、海峽揭燈于船、以照針路、

亞刺必亞海船中俄冷
今朝冷氣依然催、昨日炎氛忽地盛、趨向人情都若
此、爭先脫葛艤裘來、

印度洋值重陽

屈指家鄉是重陽、霜寒籬菊吐幽香、何知萬里歸程
客、苦暑船欄夜趁涼、

錫蘭鳴

桄榔椰林一境開、島中氣候亦奇哉、三冬煩熱如三
伏、驟雨傾盆聽舊雷、錫蘭鳴曰爲印度領、葡萄呀取
據之、後屬荷蘭、今則爲英吉利領

領

鳴中有山、行里餘達嶺、綠葉葱鬱、奇花爛熳、太
有佳趣、而眺望寬濶、認一簇青於雲際、或曰靈
鷲山、未審其實、姑記以質博雅君子、

窄路戈通蕉越間、策驢衝雨此登攀、遙青雲際如螺
髻、人道佛陀埋骨山、

船中偶筆

晨涼爽絕正秋空、午熱恰兼三伏同、十月南洋無限
蹠、水程記遍上帆風、

日夕望洋興索然、藤林例做午時眠、輕衫預覺微涼
快、雨脚新過海角天、

新嘉埠

最是東洋第一關、群嶼環繞自成灣、也看赤地漸開
拓、幾處炊烟綠樹間、

安南古交趾

黃埃散漫暑如燒、異境殊令客思饒、正是安南秋九月、椰林著子長芭蕉。

香港

一欵金甌別作天、英旗高颶太平巔、誰圖鴉片焚餘土、起此人家十萬烟。太平山名

楊子江望砲墩趾有感

劫後殘圖入太平、繁華無復舊聲名、春風惟有埠頭草、腸斷當年陳化成。

楊子江

何事樓台難得閑、青衫者却綃塵間、一條楊子江頭水、五歲之中六往還。

離文那海

霜落鬢邊潮灑衣、長途倦客苦思歸、竭來堪慰望鄉眼、一髮海門天際微。前行曾有詩云、星槎萬里幾時還、波影光寒照淚顏、正是扶桑望得盡、模糊天際海門山。海門者、南薩最高山也。

其二

風漂雨泊客思嘯、來往征途春又冬、江水似憐人老去、多情不使鑑衰容。楊子濁流興黃河同故云

新寒

潮影涵光星斗高、天風凜栗冷如刀、壯心枯盡燈挑
盡、忍有新霜上鬚毛、

船中憶巴里諸友

酒醒燈冷夢難成、遙夜殘更憶弟兄、情識鑪頭煨骨
榦、滿城風雪說歸程、巴里地寒九月方雪

洋中望嶽

鏡中何怪帶衰容、畏日鹹風浪萬重、多少羈愁為君
散、天邊亭立玉芙蓉、

遠州洋

客衣垢冷怕新寒、酒氣消時夢易殘、半夜月明天似

水、風潮聲滿遠州灘、

其二

叔却馮夷昨夜狂、海容恬靜暮蒼々、月升七十五灘
上、一片寒光白似霜、

到橫濱

殊音又困異邦人、到此言々語々真、曠却雕龍三寸
舌、暗諳一病達黃賓、

歸家

全家相聚舊團乘、情話綿々至夜闌、七歲離衷一壺
酒、嬰兒白髮滿堂歡、余自去鄉七歲于此、二尊健在弟妹無恙胎中者亦已雙角卅

然

以上四十六首

歸後題曰稿

風程水路滿囊詩。敢道支機足絕奇。惟供搔頭恍一
笑。天涯興到筆隨時。

歸東雜草

拈一枝之筆。履萬里之路。觸目抵
自。繆羅入詩。自非苟藏。六令眼空八
紜。焉能至此。杜浦子基。曾遊西洋諸
國。著歸東遊艸一卷。其為詩也。曲寫
山水風土民俗政事。使讀者如身歷
其境。親覩其事。而懷古憑吊之什。

慷慨悲壯。亦足以觀感興起焉。嗚乎。如子基肯也。密眼也。大健其脚。靈其筆者矣。壬申花朝後一日題于一六墮瘧爻弟巖谷修。○

